

## 幕末明治の「アメリカ」受容

〈コーデインイト〉吉野作造記念館 大川 真

明治以降の約一五〇年におよぶ歴史のなか、日本とアメリカは「不思議な関係」（高坂正堯）を築いてきた。日米は激しく敵対し、核兵器まで使用した凄惨な戦争を経験しながら、両国の政府は「世界のなかでも重要な二国間関係」と公言して憚らないほどの同盟関係を構築してきた。近年TPPや安全保障政策の問題から日米関係をより一層強固にしようとする様々な政治的な動きがあるが、情緒的な意見が先行している。今こそ学問的・理性的に日米関係史を見つめ直すことが必要であるが、政治史・外交史研究からの蓄積は厚いものの、思想史からの研究はそれほど多くない。

本パネルセッションでは二つの発表を通じて幕末明治の「アメリカ」受容を考えていきたい。はじめに、幕末明治のリンカーン受容というテーマを陶徳民氏（関西大学）に発表してもらおう。近代日本とエイブラハム・リンカーン（一八〇九〜一八六五）との関係の解明は、明治以降の精神史・教育史・政治思想史に対するアメリカの影響を検証する上で重要である。しかし、これまでペリー来航のインパクトに比べ、ロールモデル（向上心、正義感、職分意識とリーダー精神）や政治理念（民主主義と人種差別撤廃）として人々に深い影響を及ぼしたリンカーン現象に関する研究はきわめて不十分である。

本発表は、浜田彦蔵・新渡戸稻造・松村介石など先駆者によるリンカーン紹介、一九〇三年国定『高等小学修身書』におけるリンカーン像（全二十八課中、徳川吉宗に五課、明治天皇に三課、リンカーンに五課を割り当てた）、および櫻井鷗村・内ヶ崎作三郎・秋山弥一などリンカーン伝記作家の個人体験に対する分析を通じて、幕末明治におけるリンカーン受容の契機や軌跡、立身出世・独立自尊の精神の形成に寄与したリンカーンの影響を具体的に究明することを試みる。

続いて、幕末明治でアメリカのデモクラシーが制度面でどのように受容されたのか、とりわけ代議制度や首相公選制に対する理解をテーマに大川が発表する。はじめに、一八五三年ペリー来航の一年後に刊行され流布したアメリカ事情書である『美理哥国総記和解』（林則徐訳・魏源重輯『海国図志』を正木雞窓が和訳）を題材に、議会政治の理解を見ていく。つづいて万延元年の遣米使節団の日記を題材に、東アジア世界では馴染みのない共和政治や大統領制への理解を見ていく。最後に明六社社員として活躍した神田孝平が慶応四年に発表した「江戸市中改革仕方案」を題材に、明治の国会制度へと続く代議制度の受容を検討し、多数決制と全会一致制という二つの「決め方」の相克を論じていきたい。

以上の二者の発表に対して、近世・近代日本における法学や統計学などの西洋学術受容を専門とする大久保健晴氏（慶應義塾大学）がコメントを行う。

特別パネルセッション 第一部会（三十六号館三階三八二教室）

午後の部 一時三十分から

津田左右吉と早稲田大学 ―記憶と記録―

共催 日本思想史学会

早稲田大学文学学術院 グループ研究「早稲田大学と東アジア―人文学の再生に向かつて」（私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「近代日本の人文学と東アジア文化圏」）

（パネリスト） 防衛医科大学校名誉教授 岡本 天晴

早稲田大学図書館 小林 邦久

早稲田大学 真辺 将之

津田左右吉は、日本近代を代表する思想家で、その斬新な方法によつて日本のみならず中国や朝鮮にも及ぶ壮大な研究を展開した。今回大会を開催する早稲田大学は津田ゆかりの場所である。津田は早稲田大学の前身の東京専門学校を卒業後、吉田東伍の後任として早稲田大学文学部史学科に着任、更に哲学科東洋哲学専攻科（後に支那哲学専攻科、更に支那学専攻科と改名）に移籍して多くの弟子を育成した。その中の一人に中国古代思想の研究者である故・栗田直躬早稲田大学教授がいる。栗田は津田が起訴された裁判の時も、早稲田大学辞職の後も、その逝去に至るまで献身的に津田に付き添った。栗田は津田について短い文章をいくつか書いているが、世に向けて語ることは多くはなかった。栗田に限らず津田門下の研究者たちは自分の学生たちには津田への尽きない思い出を語っていたが活字になっているものは少なく、その学生たちの高

齢化も進んでいる現在、それらを記録に留めることが急務である。

今回は栗田が早稲田大学教授を勤めていた時の学生で晩年までその膝下に侍したパネリストが、栗田から直接聞いた一般に持たれている津田像とは別の津田の姿について報告する。

また津田没後、蔵書や遺品の多くは早稲田大学に寄贈されたが、そのうちの図書館所蔵資料について、更に津田がいた時の東京専門学校と大学史料センター所蔵資料についての紹介と、その研究状況も報告する。近現代の研究対象についての記憶をいかに記録に留めるか、また対象に関係する資料をいかに保存し整理するかという問題も、今回の試みを通して考えてみたい。

なお当日、本パネルセッションにあわせて展示も行う。

○記念展示

「早稲田大学図書館所蔵津田左右吉（津田文庫等）、服部南郭（服部文庫）関係資料」

会場 三十三号館三階第二会議室

（大会両日とも開催。三十六号館より徒歩一分）

国史学とアジアと仏教文物

〈コーディネーター・司会〉佐藤 文子（佛教大学）

〈パネリスト〉

吉田 一彦（名古屋市立大学）

「黒板勝美の宗教史研究と国史叙述―仏教・神道・道教」

池 美玲（韓国・藝術綜合大学）

「いわゆる日帝期朝鮮における仏教文物調査

―関野貞の活動を中心に―

手島 崇裕（韓国・慶熙大学）

「黒板勝美の南洋調査と〈日本〉」

佐藤 文子

「総括 古代観の組成過程と〈日本〉」

このパネルセッションでは、前近代の現地現物に即した具体研究に実績がある歴史家が主体となつて、国境線で括られたコミュニティ（小規模な私たち）を単位とする過去の自国史を形成した思想をあきらかにするとともに、人類の営為を読み解く新たな人文学の地平を拓くことをめざす。

国民国家の実現をめざす近代日本にとって、古代は復古するべき理想そのものを指し、ために一〇〇年以上前に描き出されたその像は、いまもたやすくかわることができない。維新勢力や宗教勢力などの複数のユニットが、各々の由緒や権利を主張しぶつかりあいながら、近代日本のオリジンにふさわしい古代が選り取られていく様相を仏教文物をツールとしてつづあきらかにしていく。

東京帝国大学の国史学の教授として活躍した黒板勝美は、国史の基本となる歴史を叙述した。一方、個別研究では、古代における道教、神仙思想の受容に強い関心を持ち、それらと古神道や仏教との関係について論究している。吉田報告では、彼の国史叙述と個別研究との関係について考察する。

こんにちの認識において、美術史は岡倉天心から建築史は伊東忠太から始まったと捉えられているが、当初はひとつの領域のなかに、美術史・建築史が含まれつつ、調査研究が進捗した。具体的には、岡倉・伊東の後に登場する関野貞の存在がきわめて重要である。池報告では、特に関野の活動に注目し、韓国仏教文物調査と韓国美術史の形成の接点について論じていく。

大正期にいったん確立した黒板の国史学は、昭和史の展開のなかで、常に〈外〉との対峙を余儀なくされた。その具体的様相を、黒板勝美の南洋調査にみるができる。新しい日本のイメージを補完する風景を南洋方面に探求し、国史学の文脈に取り込み、あるいは国史学の枠組みを支える〈外〉として位置づけていった様相を手島報告であきらかにする。

このパネルセッションは、全体として、自国史の構造に注目し、その思想をアジア的観点から解明するものである。〈国史学〉は、明治維新直後からの試行錯誤の末、仏教文物を万邦に誇るべき財の中核に据え、筋立てに組み込んだ。現在の日本史分野は根底にこの流れを承けており、このパネルは今後の学問の方法の模索としての意味を有している。

\*なおこの研究は、日本学術振興会科学研究費基盤研究（C）「アジア的観点からみた〈国史学〉の比較思想史的研究―仏教文物の位置づけを鍵として―」の研究成果の一部である。（研究代表者 佐藤文子）

「大正デモクラシー」の再検討

〈コーディネーター〉同志社大学 平野 敬和

「大正デモクラシー」は広く政治・社会・文化の領域にわたる思想運動であった。それは空間的にも、日本の民主主義的傾向と東アジアの民主化を連動させる点に特徴があった。本セッションでは、吉野作造・石橋湛山・柳田國男という、当該期を代表する思想家を取り上げ、彼らがそのような時代にいかなる議論を展開したのかを検証する。それと同時に、戦後の歴史学・国際政治学・思想史学における「大正デモクラシー」論の再検討も試みたい。三人の報告者は、とりわけ一九七〇年代以降のデモクラシー研究の成果に対する批判と継承、という課題を共有している。

吉野作造の軍部批判と「満蒙特殊権益」論

日本学術振興会特別研究員 藤村 一郎

吉野作造の軍部批判は、従来、主として統帥権の独立批判、軍縮論を内容とし国内政策論として整理されてきた。ところが、吉野の軍部批判論のターゲットは、国内のデモクラシー化とともに日本外交の健全化にあったとみられる。吉野は国際的趨勢を背景に、中国における勢力範囲の撤廃を主張していたが、それは出先軍（関東軍）による満洲軍閥の籠絡によって生まれる「密約的利権」を指摘し批判することへと接続する。本報告では、吉野の軍部批判と对中国政策をあわせて読み直すなかで、吉野が「満蒙特殊権益」について何を問題にし、いかなる処方箋を出していたのかを検討する。

石橋湛山のアジア

同志社大学 平野 敬和

本報告では、第一次世界大戦から一九二〇年代の石橋湛山のアジア論を取り上げる。石橋は、日本の政治・社会の民主化を東アジアの民主化に接続させて論じた、近代日本を代表するデモクラットである。ここでは、当該期の彼が掲げた「小日本主義」論の思想的立場付けを試みるに当たって、帝国主義批判と植民地論、中国やアメリカを中心とした東アジアの国際政治をめぐる議論に注目する。すなわち、世界大戦を契機として、帝国主義・植民地主義が正当性を失い、民族自決主義が唱えられるなかで、東アジアにおける民族運動に向き合った石橋が、東アジアの地域秩序についてどのような構想をもっていたのかを明らかにする。

柳田民俗学とアカデミズム史学

岐阜大学 田澤 晴子

柳田民俗学は、官学アカデミズムに対抗する「民間学」だとする議論が通説となってきた。近年、戦前の民俗学とアカデミズムとの関係や民間学者同士の研究方法が議論の俎上にのぼってきている。本報告では、歴史学との関係に焦点をあてて考察する。第一に一九一〇年代において、柳田の議論と歴史学者の記紀論や研究方法とはどのような関係にあったのかという点である。第二に、地名由来や伝説などの口碑をめぐる柳田とアカデミズム史学の認識について考察する。第三に一九二〇年代から三〇年代において民俗学講座等における柳田の講義内容ならびに帝国大学等における民俗学研究について考察し、柳田民俗学とアカデミズム史学との関係性を明らかにしたい。